

## 年間第2 1 主日C

ルカ13・22-30

今日の福音には、「**狭い戸口から入るように努めなさい。**」というイエスの言葉が響いています。今日の福音はルカ13章のものですが、同じことはマタイ7章の山上の説教にもあります。そこでは「**狭い門から入りなさい**」と言われていています。「狭き門」という言葉は学校の入学試験などでよく使われているため、より身近に感じられるかもしれません。狭き門であれ、狭い戸口であれ、問題は、イエスがこの表現で今日の私たちに何を伝えようとしているのか、ということです。

今日の福音書の中で、私たちはこのよく知られた言葉を改めてどのように受け止めればよいのでしょうか。マタイによる福音書7章の山上の説教では、「**狭い門から入りなさい**」と言われていています。「滅びに通じる門は広く、その道も広々としてそこから入るものが多い。しかし、命に通じる門は狭く、その道も細い」です。狭い門とは、滅びに至る広い門に対して、命に至る狭い門のことです。滅びと命というとき、私たちはこの命が永遠の命であり、それに到達できないことが滅びであることを、福音から学び、知っているのです。狭い門と狭い戸口は、聖書を通してイエスの御言葉を聞き入れた者にとって、明らかに永遠の命に至る門であり、戸口なのです。

ルカ福音書では、「**人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く**」（ルカ13・29）という終末論的表現で、神がすべての人を招いておられることがよりいっそう強調されています。ところが、今日の福音には家の主人が扉を閉めた後で、外に立って扉を叩いても遅いというのです。私たちはこの言葉をどこまで真摯に受け止めたらよいのでしょうか。狭い門、狭い戸口はどこにあるのでしょうか。イエスが言う「いのちに通じる狭き門」（マタイ7・14）とは、どこにあるのでしょうか。

狭い門の「門」という言葉は、ヨハネ福音書の中にも出てきます。ヨハネ10章の「わたしは良い羊飼いです」という皆さんもよく知っている良い羊飼いのたとえの中です。イエスは「わたしは門である」とも言っているのです。ヨハネ10章7節以下で、イエスは「わたしは羊の門である」と言われます。わたしが門です。わたしを通して入る者は救われます。門を

出入りする者は、牧草地を見つけることができます。盗人は、羊を盗むため、殺すため、あるいは滅すために来ます。しかし「わたしが来たのは、羊がいのちを受けるため、しかも豊かに受けるため」です。

このヨハネ福音書の言葉から、ルカとマタイ福音書の記事を振り返ると、狭き門と狭き戸口とは、イエス様ご自身を指していることがわかります。私たちが信じているイエス・キリストは、父なる神が私たちの世界に遣わされた御子なのです。この御子イエスを通して、すべての人を招き入れてくださるのです。ですから御子イエスは永遠の命への入り口、門であり、戸口なのです。ところが、ルカ福音書はその門の扉が閉ざされる時が来るというのです。今日の福音書の冒頭に戻って考えてみましょう。私たちは、イエスがこの言葉を語ったとき、それを聞いていた人々の中にいるつもりで耳を傾けなければなりません。

さて、イエスが、この話をされたのは、「エルサレムに向って進んでおられた」ときです。エルサレムで、イエスは十字架にかかってくださいました。つまり、イエスの十字架という狭き門、狭き戸口通ってしか実現できなかった命の道です。イエスが招くいのちへの戸口が十字架であるということなのです。十字架が命への戸口であるというメッセージによって、私たちが恐れ、ためらうことのないように祈り求めたいと思います。そのためにも、ルカの福音書23章40節以下に語られているイエスとともに十字架につけられた一人の人のことを深く心に刻みたいと思います。イエスの十字架の場面の最後に登場するこの人は地上におけるいのちを引き取る前に、十字架のイエスの招きを受けて、永遠のいのちの宴に入る最初の人となったのです。「あなたは今日私と一緒に楽園にいる」と語られたのです。いのちへの戸口は、十字架の苦しみの最中であって、私たちの側にもにいてくださる十字架のイエスに目を向けることによって開かれるのです。十字架のもとにたたずまれた聖母が、私たちが担っている十字架を御子とともに耐え 忍ぶ希望の光に包んでくださるよう祈り求めたいと思います。